

御伝鈔(その6)

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、親鸞没後33年に親鸞聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。続いてその翌年、親鸞聖人の伝記絵『親鸞伝絵』を著わされ、詞書(ことばがき)の部分だけを『御伝鈔』(上巻・八段、下巻・七段)といいます。

第六段「信行兩座(しんぎょうりょうざ)」

法然上人が生前に他力往生のみ教をひろめられたところ、世間の人々はみな上人に帰依しました。朝廷をはじめ国中の人々が法然上人のみ教を仰いだのでした。

そんなこんなで、法然上人の草庵には貴賤を問わず多くの人々がやって来ましたので、門前はまるで市場のようににぎやかでした。法然上人の弟子・僧侶は380数人ということでした。しかし、本当に法然上人の教をいただいて一生懸命にお念仏を申しているものは大変少なく5、6人もないということでした。

そこで親鸞聖人が法然上人にあるとき申し上げました。「私が難行の聖道門を捨てて、易行の浄土門に入れたのは全く法然上人の教に出遇えたおかげです。これ以上の喜びはありません。ところが、本当に法然上人の教をいただいて浄土へ参ることが出来る程の信心をいただいているものがどれだけいるのでしょうか?今度お弟子のみんなが参集するときに、私が質問をして、その心の内を試してみたいと思いますが、いかがでしょう。」と。すると法然上人は、「よろしい。明日みんながやって来たときに質問してみなさい。」と仰いました。

そこで翌日、お弟子が参集している場で親鸞聖人が、「阿弥陀仏の本願を信じて往生する(信不退)のか、それとも念仏を多く称えたその功德によって往生する(行不退)のか、どちらか態度を明らかにするため二つに分かれてすわってください。」と申されました。

それを聞いた300人余りのお弟子たちは、よく親鸞聖人の意図とするとところが分からない様子でしたが、聖覚法印(せいかくほういん)と法蓮坊信空(ほうれんぼうしんくう)とが「信不退の座にすわりましょう」と申されました。

そこへ遅れてやって来た熊谷直実(くまがいなおさね)入道が「何をしておられるのですか?」と親鸞聖人に尋ねましたので、「今、信不退と行不退とに分かれてすわってまわっています。」と親鸞聖人が答えましたところ、熊谷直実が「私は信不退の座にすわりましょう。」と申しました。

しかし、後の沢山のお弟子はとるべき態度をなかなか決めかねていました。そこで、親鸞聖人自信は信不退の座にすわられました。すると、しばらくして法然上人が仰いました。「私も信不退の座の方にすわりましょう。」

その時、態度を決めかねていたお弟子たちは、敬いの様子をする者もいれば、後悔をしてうつむく者もいました。



手足を切られて、痛かった
だろくに……。切った部分に
は、せめて木の栄養剤のような
液(薬)

を、塗つてや
らなくて
はと思
いまし
た。



翌日の筋肉の痛みは、天罰
かな……



実は、私の都合で、木を切ってしまいました。
桜の木は、物置の屋根にかかっていた部分。

塀際の雑木は、落ち葉が下の
田んぼや溝に落ちて、近隣の方
に迷惑を掛けつ放したった箇
所。

木を切る最中は、慣れないこ
とゆえ、それこそ無我夢中。し
かし切った後、その無残な状況
を見て、初めて木の気持ちにな
って考えてみました。

住職レター

木を切る痛み……。感じたことありますか?
木を切った時、翌日に感じる、筋肉の痛み
ではありません。木の立場になって、切られ
た時、その木が感じているであろう痛みのこと
です。